

第 33 回西アジア発掘調査報告会の開催にあたって

日本西アジア考古学会会長 桑原久男

このたび、第 33 回を迎えた西アジア発掘調査報告会は、「考古学が語る古代オリент」をタイトルに掲げ、日本の発掘調査隊が西アジアやその周辺地域で行う調査研究活動の最新情報を広く一般にお伝えする貴重な機会となっています。昨年度にひきつづき、西アジア考古学会と東京文化財研究所の共催で、上野に所在する同研究所で開催される運びとなりましたが、諸準備について尽力をいただきました関係各位に対してまずは御礼申し上げたいと思います。

今回の報告会のプログラムを見ると、口頭・ポスターを含めた発表の総数は 27 件で、その内訳は、アナトリア・コーカサス(4 件)、メソポタミア(3 件)、レヴァント(3 件)、アラビア半島(7 件)、エジプト・エチオピア(6 件)、中央アジア(4 件)となっています。近年の動向として、報告総数の顕著な増加と調査地域の広がりが指摘されているところですが、今回の動向もその延長上にあり、中央アジアに加えて、とくにアラビア半島での活動が目立って増加していることがわかります。また、イラクにおける考古学的調査の再開なども目にとまります。調査対象となる時代も、旧石器～新石器時代、青銅器時代、鉄器時代、ヘレニズム・ローマ時代、イスラム時代と幅広いものとなっています。

長らく対面方式で行われてきた発掘調査報告会は、コロナ禍を経て、対面とオンラインを併用したハイブリッド方式で開催されるようになりましたが、それもすっかり定着した感があります。昨年度の場合は、会場参加が両日で 124 名、オンライン参加が両日で 389 名と、リモートでの参加がまれに見る多数となりました。今回の場合はどうでしょうか。毎年、報告会会場に足を運んでいただいている常連に近い方々もあれば、あるいは、昨年 NHK で放送された『3 ヶ月でマスターする古代文明』を視聴して西アジアの歴史や文明に関心を覚えて、初めて参加するような方々もあるかもしれません。会場参加、リモート参加のいずれであれ、「見直される文明の始まり」、「都市は最終手段だった」、「ヒッタイト・鉄の王国のヒミツ」、「ピラミッドと黄金が王国を変えた」、「中央アジア・シルクロードの原点を探る」といった諸々のテーマについて、最前線で活躍する当事者の発表を通して、最新の情報に触れ、知識をアップデートすることができるでしょう。いずれにしても、今般の発掘調査報告会が、西アジアの考古学について関心を持つ人々の裾野がさらに広がってゆく一助となればと願うところです。

考古学という学問は、遺跡・遺構・遺物を通して、過去の人類の社会や文化・歴史、環境との関わりなどを明らかにすることを目的としていますが、とくに予算や調査期間が限られた海

外調査では、基本を踏まえつつ、最新の理論・方法・技術を駆使して実践にあたることが求められます。また、考古学が研究対象とする遺跡・遺構・遺物といった考古資料は、考古学の研究資料であると同時に、文化遺産としての現代的な価値や意味をもち、その保存や活用に対する取り組みも求められます。とくに期待したいのは、大学進学に際して進路を考えている高校生たちが、この報告会に参加して、このような考古学という学問の実際に触れてもらう機会になればということです。

近年、世界情勢が大きく動いて現実主義(リアリズム)の路線や風潮が台頭・顕在化し、混沌とした状況を呈していますが、西アジアはもとより、日本もその例外でないことが実感される昨今です。西アジアにおける古代文明の盛衰の歴史に今こそ学ぶところが大きいようにも思われます。今般の報告会では、西アジアの各地における各調査隊の実践を通して、考古学の最前線の成果に加えて、考古学というフィルターを通して、西アジアの各地域の現代社会の一端を垣間見ることができるかもしれません。近年の世界情勢にも関連して、日本の調査隊が現地調査を行うに際して問題となっているのは、航空運賃の値上がり、現地の物価上昇、円安という、金銭的な三重苦です。コロナ禍以前の状況と比べると、同規模の調査を行うためには2倍近く予算がかかるといっても過言ではありません。このような厳しい状況にも関わらず、現地調査を地道に継続、推進している各調査隊の努力と熱意に頭が下がります。

現地のフィールド調査に参加することは、西アジアの考古学を志す学生にとってはまたとない学びの場です。その参加の機会を少しでも後押しができるよう、学会としても何らかの取り組みを進めたいと考えているところです。各方面のご支援をお願い申し上げます。次第です。
